

ジョン・デューイの教育実習論

— 教員養成における理論と実践の関係について —

John Dewey's Theory of Practice-Teaching

市川 純 夫 (教育学教室)

Sumio ICHIKAWA

抄録

この論文は、教育実習を「教育における理論と実践の関係」という観点を踏まえて論じているジョン・デューイの議論を紹介、検討し、その論が教育実習を実際に行っていく上で何を意味しているのか、また教育研究は実践とどのような関係を持ちながら進められるべきかという問題に何を示唆しているのか、ということについて考察したものである。

デューイは、他の専門職の養成教育の発展の歴史を検討しながら、「専門職のための養成教育における実習的学習の場は、すぐさまその職の熟練者を作り出すのではなく、実際のスキルを個人として独自にマスターするのに必要な知的方法を身につけることを目指している」と分析し、教員養成教育においてもそうあるべきであることを論じ、それを実験室的観点として提案している。実習的学習において外的テクニックに第一の注目が置かれ、子どもの内的活動に注意を向けようとしない傾向が増長されることを心配している。

キーワード：デューイ 教育実習 実験室的観点 専門職 教授テクニック

はじめに

本学部の実践研究指導センターでは、センター独自の研究活動において中心的な位置を占めるプロジェクトの一つとして、「教育実習プログラムの開発研究」を進めている。本論文は、そのプロジェクト研究の基礎的理論的部分を担う一つの作業として位置付けられ、行われたものである。

教育実習とはそもそも何を目的として行われるものであるのか、という根源的な問題は、一見改めて問う必要もない当然の回答が用意されているようでありながら、しかし実はこの問題への考え方が実習に携わる人々の間で微妙に違い、その違いが実際の教育実習のありかたを大きく左右していると思われる。この論文は、この根源的な問題にまで立ち返り考察したものである。この問題について考察を進めていくと、教育において理論と実践はどのような関係にあるべきであるのかという問題に不可避的に行き当たる。この問題はまさに、実践研究指導センターの活動を進めていく上で、常に問われなければならない

問題でもある。従って、単なる実習についての論議を越えて、「教育における理論と実践の関係」という大きな問題を視野に入れながら、考察を進めていきたい。

上のような課題をもって、この論文ではまず研究の手初めとして、教育実習論を上述のような観点、即ち「教育における理論と実践の関係」という観点を踏まえて展開している、ジョン・デューイの論を紹介、検討し、その論が教育実習を実際に行っていく上で何を意味しているのか、また教育研究は実践とどのような関係を持ちながら進められるべきかという問題に何を示唆しているのか、ということについて考察してみたい。

デューイは、多くの論文の中で、教員養成についての考察を進める上での大きなヒントを与えてくれているが、教員養成の教育について直接に論じているものは意外に少ない。この論文では、その少ないものの内の一つである John Dewey; The Relation of Theory to Practice in Education, National Society for the Scientific Study of Education Third Yearbook 1904 pp.9~30 を取り上げて、検討する。ここでは、その教員養成論、教育実習論に直接かかわる記述を中心に取り扱い、その基盤にあるデューイの教育思想について論じながらその教育実習論とのかかわりについて述べるのは、別の機会に譲ることにしたい。

1. 「実験室的観点」

デューイの論はまず、次のことを前提とすることから始まる。「教師のための十分な専門職教育は理論的な部分だけからなるのではなく、ある量の実践的学習も含んでいる。」この前提から出発して、この後者の実践的学習の部分をめぐる論議に入っていく。

デューイによれば、教員養成におけるこの実践的部分の目的をどこに置くかということについて二つの異なった考え方があり、そのどちらをとるかによって、実習的学習の量、条件、方法が異なったものになるという。その二つの考え方とは、一つは実践的実習的学習の目的を、教職に必要な道具・手段を実践的に使いこなせるようにしてやることに置く考え方である。「学級での授業、学級運営のテクニックの獲得であり、教授スキルの熟達という目的である。この目的を考えると、実習的学習はそれだけのところでは徒弟訓練の性質のものになる。」さて次にもう一つの考え方であるが、それをデューイはこう述べる。「他方で我々は、実習的学習を、生きた、真の理論的学習のための手段として行うことを目指すこともできる。教材 (subject-matter) についての知識、また教育の原理についての知識の教授の場として位置付けるということである。」この立場を徒弟的な考え方と明確に区別して、これをデューイは実験室的観点 (laboratory point of view) と名付けるのである。

デューイは、この両者の見方の対照は明白であるとして、次のように述べている。「一方の徒弟的観点からいうと、目標は実際の教師を作り上げ、支度させることにある。その目標は直接的であり、極めて实际的である。もう一つの実験室的観点からいうと、そこで直接目指されるもの (究極の目標へ至る手段として位置付けられる) は、その場であったかも役立つ職人を作り上げることではなく、立派な技倆を支える知的な方法と素材を与えることである。」そして、このように位置付けられた実習的学習は、「それが触発する知的側面の作用、つまり学生が獲得しようとしている教材の持つ教育的意味と教育の科学、

哲学、歴史の持つ教育的意味をより深く把握させるということを第一に考えながら運営される」ことになる。

もちろん、デューイは、実習的学習の成果は上のように二つ区別して考えられた目標の一方に独占されるものであると考えているわけではない。「物理や化学の学生にその原理についてのより生きた理解を与えるという実験室的観点から行われる実習が、同時に学級の授業と運営の技術を習得させるという成果を生むことはないと考えるのは、全くおかしいことである。また、逆に、そのようなスキルを獲得するプロセスが偶然に教材の教授や教育理論の教育を啓発し、豊かにするということがないと考えるのも、おかしいことである。」しかしそれにもかかわらず、この二つの目標のどちらを主に考えるかということによって、実習的学習に与えられる時間とやりかた、実習の監督・指導・批評の方法などの点で、大きく違いがでてくると、デューイは言うのである。

2. 他の専門職の養成教育が示唆するもの

デューイは、教員養成の実習的学習の場面でこの実験室的観点をなぜとる必要があるのかを論じていくわけであるが、その最初に、他の専門職 (profession) の例を取り上げて、そこから示唆されることとして、論議を進めている。

教師という仕事は、「特別な専門職的準備の必要性を認められた最後のものであり」、その意味からも、建築家、工学技術者、医者、法律家といったより熟成した他の専門職の準備教育のありかたから学んでいくべきであるという。そこで、他の専門職のための養成教育の歴史的発展に目を向けてみると、大きな傾向として次のような3点が見いだされるとデューイはいう。

- (1) 専門職の仕事に就くのに要求される学問的学習への要求が、より大きくなってきたこと。
- (2) 専門職の仕事の中核として、応用科学、芸術における発展があったこと。例えば、化学と生理学の発展によって、医学訓練におけるその位置が大きくなった。
- (3) 時間的制約などの条件を考慮して、プロフェッショナルスクールは、広範で詳細な実習よりむしろ、典型的で集約的な実習を学生に与える場合に最も有効に機能するという仮定に立って、実際的な学習が配列されてきたということ。

デューイはさらに論をすすめて、こう述べる。「専門職のための養成教育における実習的学習の場は、すぐさまその職の熟達人を作り出すのではなく、実際的スキルを個人として独自にマスターするのに必要な知的方法を身につけることを目指している。」このような考え方は他方では、ルーティーン化したスキルとテクニックの獲得は、学生が卒業して仕事を実際始めるまで延期することを意味として含んでいた。

3. 本物のスキル学習のための条件

諸専門職のための養成教育はこのような発展を遂げてきたが、その初期にはやはり、学生を最初から可能な限り実際的スキルに熟達させるべきであると考えられた時期があったという。しかし、プロフェッショナルスクールがその考え方から徐々に脱して、実習的学

習は知的方法に生命を与え、それを明確にするために行われべきであるという考え方に進んでいくことになったのであるが、その動きを進めさせた原因となったものを、デューイは二つあげている。

- a) 第一には、それらの学校では教育に使える時間が限定されていることであり、その結果、時間を有効に使う必要があるということである。徒弟的訓練はそれ自体悪いことではない。しかし、学生が訓練学校ですごせる時間は短いのであるから、それが有効に使われることが緊急の課題である。そして、比較のなかでいうと、短い時間を賢く使うには、科学的基礎を与えることであるということになる。これは、実際の仕事をしながらでは十分に獲得しえないものであり、他方、よりテクニカルな種類のスキルを獲得し、あるいは完成するための時間は、職についてからの生活でも与えられるものである。
- b) 第二には、それらの専門職のための訓練学校では、スキルを最上の形で獲得し、使用するための十分な条件が備わっていないということである。実際の場合に比べてみると、法律学校や医学校がすることのできることは、よくても多少離れて現実のものをシミュレーションしたコピーを用意することでしかない。十分に準備のできた人であれば実際の仕事の中で無意識のうちにどうしても獲得してしまうようなスキルを、これらの学校が与えようとすることは、有効ではない。それは、実際の銀行勤務の中でなら数週間のうちに獲得できる商用算術のスキルを、普通学校が何箇月もかけて与えようとしている（そしてそれは概ね失敗に終わる）のと同種である。

さて、上に述べたことは、実習学校という現実の教育の場を持っている教員養成の学校には当てはまらないという反論があるかもしれないが、実際の教育が行われている実習校を持っていてもやはり、そこでの実習的学習の条件は、本当のスキルを獲得するのに適したものではない、とデューイは論ずる。

デューイによれば、ちょっと見てはわからないかもしれないが、実際の学校での授業の条件と附属実習校での実習的場面の条件とを違うものにしてしまっている点は多々存在するという。学級での訓育の責任を実習生はおっていないこと。示唆を与え、自分の指導の下にすべてを進めようとする熟練教師が常に存在していること。詳細な監督・指導が行われること。学級規模が縮小されていることなどである。例えば、授業を計画する実習生は、あるセットされた場面での授業を準備させられ、その授業計画案を批評、添削され、その作り直された授業案で授業をし、その授業が成功したかという批評を受ける。これは、実際の教師、つまり、生徒との接触の中で得られた経験から自分なりに授業計画を立てたり検討したりする教師とは、全体的に異なっているというのである。

このように、教師としての知的責任を試され、育てられるという場面を欠いてしまっていることを指摘して、デューイは、教員養成の実習的場面においては本当の徒弟制に徹して学生を訓練するという条件は整い得ないと考えたのである。

4. 本来の教師としての力量形成を犠牲にしての外面的テクニックの獲得

さらに注目すべきことは、デューイが、教師としてのテクニックを獲得する場としての教育実習にあまり早期から導入されることは学生にとって害がある、ということにまで論

議を進めていることである。「教授と訓育における熟達を獲得するということに強調点を置くことは、実習生の注目を誤った場所に置き、注意を間違った方向にむけてしまうことにつながる。」この論議を少し詳しく見てくことにしよう。

教職を目指して学習している学生は、しばしば二つの課題に直面し、集中的な取り組みを迫られるとデューイはいう。その二つとは、

- 1) 教材 (subject-matter) をその教育的価値と教育的利用法の観点からマスターするという課題。あるいは、同じことであるが、教育の原理を教材に適用するという課題。
- 2) 学級の運営のテクニックを習得するという課題。

この両者の課題は、別個に存在するものではなく、依存しあっているものと考えられるが、学生の側からいえば、同時に両方の課題に同じ注目を払うということとはできないということになる。初めてクラスの数十人の子どもの前に立ち、授業の責任だけでなく、全体としてのクラスに必要な秩序を保つという責任を持たされる教師が直面する困難は、大変厳しいものである。そこで不可避免的に、表面的な運営の方に教師（実習生）の注目が向いていってしまうことになる。これをデューイは憂えるのである。

「ピアノのテクニックと同じように教授のテクニックは存在する。もし、そのテクニックが教育的に有効なものになるためには、原理に基づかなければならないはずである。しかし、それを教育的に用いる能力が無くても、方法の外形だけを学生が獲得してしまうことも可能なのである。」

ここでデューイは、教育という仕事の本質への考察に立ち返って、論を展開する。子どもは内的注意と外的注意をもっており、内的注意の活動に注目することこそ、教育という仕事の本質である、という論である。

「すべての教師が知っているように、子どもは内的注意と外的注意をもっている。内的注意は、無条件に手元にある素材を考えることである。それは精神的な諸力の直接的、個人的発現である。であるからそれは精神的成長の基礎的条件である。この子どもの精神的活動を見てゆくことができるということ、つまり精神的活動の有無を見分けることができるということ、またその活動がどのように始まりどのように続いているかを知ること、その成果をテストで知ることができるということ、こういったことは教師を判定する基準になる。それは精神の活動への洞察力、本物とみせかけの区別の力、そしてその活動のあるものを促進し、あるものを止めさせる教師の能力の判定である。」

「他方、外的注意は、本や教師そのものを対象物として向けられる。それは思考の運動よりも慣習的な姿勢や肉体的態度の中に表示される。子ども達は大変器用に、学校授業への注意の外形を慣習的な期待された通りのやり方で示す術をわきまえている。しかし、その素材への思考、想像、感情といった内的活動が全くそれに関係していないということがあるのである。」

デューイは、教師が注目すべき子どもの精神活動は内的注意であること、そしてそれを教師がいかにとらえ、働き掛けていくかが教育活動の本質であり、その力が教師には専門的力量として問われている、と論じているのである。

ところが、

「学級の秩序を保つという切迫した実際的问题に早くして投げ込まれすぎた教師は、どうしても外的注意のことを第一に置かざるをえない状況におかれることになる。その教

師はまだ十分に訓練を受けてきていないので、生徒達が有効に健全に注意を向けていくために必要な教材の種類や様式を素速く自動的に判断するための心理学的洞察をすることができない。

しかし、他方で彼は、学級の秩序を保たなければならないことを知っている。そして、生徒の注意を自分の質問、示唆、教授、発言、そして生徒の『学習』に引き付けておかなければならないということを知っている。したがって、そのような状況ではどうしても、生徒の注意の内的側面よりはむしろ外的側面とのかかわりの中でテクニックを獲得するという傾向が出てきてしまうことになる。」

このようにして、早く実際の場に投げ込まれ過ぎた教師は、教育の本質としての精神の内的活動の側面への洞察を犠牲にして、外的表面的活動の側面のみに注目し、その面でのテクニックを獲得することに走ってしまい、本来の教師の力量の獲得が疎外されることになさえてしまうというのである。

5. 教育における理論と実践の分離状態現出の要因

このように実習的学習において教職に必要な外面的テクニックに第一の注目が置かれてしまうと、子どもの内的活動に注意を向けようとしないう傾向が作られ、それと並行して学生の中には、「科学的な根拠よりも経験的な根拠を求める仕事の習慣が形成されていってしまう」とデューイは言う。

「学生は自分の実際の授業の様式を、自分が獲得しようとしている諸原理に合わせようとするのではなく、その時々で成功したとか失敗したとか見える経験に合わせようとし、自分よりも学級秩序を保つことに成功している経験ある教師のしていることに合わせようとし、また、他人によって与えられた命令や指示に合わせようとするようになってしまう。このようにして教師を支配する習慣は、教育の心理学、教育の論理、教育の歴史の諸原理を殆ど参照にしないものになってしまう。」

さらにデューイは論を進め、この上のことが、教育の仕事における大きな悪弊である二元性を作り出すことに、大きな役割をはたすことになってしまっていると指摘する。二元性とは、一方で子どもの自己活動の原理とか自己制御の原理とかいった抽象的な高い理論上の諸原理を熱心に崇拝し、もう一方では、学校の実践の実践の中では、公認された教育学の確信に殆ど注意が払われないという、理論と実践の分離状態である。教育実習において何に注目するかという問題の中にも、その二元性の源が見受けられるとデューイは指摘しているわけである。

デューイは論のまとめとして、こう述べて、教員養成における実習的学習を実験室的観点から行うべきであることを主張している。

「教師がその習慣を形成していく源として二つのベースがある。この習慣は、用いる最上の道具を適用する中で形成されるが、それは技術的熟達だけでなく知的インスピレーションと批評のもとではじめて形成されうる。この形成は、将来の教師が、教材と教育の心理学的、倫理学的哲学にかなり通じている場合のみ可能である。これらが教師の精神的習慣に同化され、観察、洞察、反省という実際の活動を支える性質の一部になって

いる時にのみ、これらの諸原理は自動的、無意識的に素速く、有効に適用しうるのである。

そして、このことが意味しているのは、実習的学習は、専門職を目指す学生が即座に熟達を得るのを助けるということよりは、かれが思慮深く機敏な教育の研究者になることを助けるという点で彼に益するという点に、まず第一の注目が置かれて行われなければならないのである。」

6. デューイの実習論が示唆するもの

以上、デューイの「教育における理論と実践の関係」についての考え方に基づいた教育実習論をみてきた。

少し時代的背景について考えると、この論が出された時期のアメリカ合衆国においては、まだ教員養成がノーマルスクールという中等教育レベルの訓練的機関によって主に行われていた状態であった。他方、高等教育機関としてのカレッジは、教員養成という役割を特に意識することがないままに、現実にはその卒業生が中等学校の、また初等学校の教師となっていくという点によって、教員養成の機関としての役割を果たしている状況であった。ちょうどこのデューイの論議が行われた頃は、中等教育レベルの教職のための訓練機関という性格を色濃く持っていたノーマルスクールが、高等教育機関としてのティーチャーズカレッジへと発展し、高等教育レベルで教員養成を行うようになっていき、他方、カレッジの側は、教員の養成という仕事を意識し、そのために教職のための専門教育の部分を発展させていくという道をたどり始めた時期であった。ノーマルスクールは、その養成教育の内容の学問的レベルを高める方向に向かい、カレッジはその教職のための専門教育の比重を高めていくことになる。ここにおいて、教育の科学の学問としての充実が期待されることになったのである。

デューイはカレッジ側の人間として、教育科学を大いに発展させた人物であり、またそれを基盤にして、高等教育機関において教育学の地位を確かなものにすることに大きな役割を果たした人物であった。その立場から、教員養成において教育についての理論的学習が重要な役割を果たすべきことを論じ、その主張はここで取り上げた論文においてもうかがうことができた。彼はこの論の中でも、この学問的理論的学習の重要性はカレッジにおける教員養成だけでなく、ノーマルスクールにおける養成においても不可欠のものであると述べている。デューイの教育実習論を検討するには、まず彼が、このような教育科学の確立期の人物であり、教育科学の発展に基礎をおいて教職を専門職として確立することに力を尽くした人物であったことを念頭に置いておく必要がある。

デューイの思想と関連させて彼の教員養成論、教育実習論を検討することは他の機会に譲って、ここでは、彼の展開した教育実習論が現在の教育実習のありかたに対して示唆することについて、いくつかの点にわたって考察してみることにする。

まず第一に、教育実習において何をを目指すのかということそれ自体が、現在十分に論議されていないということの問題性を感じざるをえない。教育実習が、教師としての技能を与えて实际的教師を作るといふ、いわば教員養成を完成させる段階に位置付けられるもの

であるのか、あるいは教育という営みを追究する力と姿勢を獲得させるための場所として位置付けられるものであるのか、このことについての論議が十分に行われなままきているのではないか。このことについての考え方によって、実習の時期や方法が異なってくるはずである。もちろん教育実習はその両方の意義を合わせもっているということではあるが、それで論議をとどめてしまうのではなく、教育実習が大学という研究・教育の機関で行われている教員養成教育の中に位置付けられているということの意味をふまえ、その目標について論議を深めていかなければならないだろう。

第二に、そのことから言えば、教育実習を主に引き受ける学校側と大学とが共同して計画を立てることが不可欠だと言えるであろう。いや、デューイの論をきちんとふまえようとすれば、日常的に大学と実習担当校が連携しながら教育研究を進めていくということが、不可欠である。そもそもこのことなしに、教育実習の充実などありえないということを、デューイの論は示している。

第三に、デューイの論は、教育実習がどのように行われるべきかということと同時に、教育学部側における理論の教授・学習がどうあるべきかということについて、示唆を与えているように思われる。デューイのいう教育現場における二元論の状態を作り出しているのは、テクニクへの注目に偏った実践の在り方にも要因があるだろうが、もう一方では、理論研究のあり方、現場においてその検証もしようのないような理論研究、理論学習のあり方にも原因があることが示唆されているのではないだろうか。このことについて見直される必要があるだろう。もちろん短絡的に「役立つ」理論であるべきだということを言うつもりはないし、それはデューイの意図ともずれてしまうであろう。そうではなく、デューイのいう知的ひらめきをも含むレベルで、つまり教師の専門的知的判断能力を支える理論というレベルで、教育現場において試される理論学習でなければならないであろう。理論は経験の中から生まれ、経験に帰るものであるとすれば、実際の場面で鍛えられる理論でなければならないであろうし、そういう理論追究の姿勢を学生に持たせる教育が要求されているといえよう。

おわりに

デューイの教育実習論について紹介し、検討をしてきたが、考察においては少し性急に現代の問題に引き付けて論じ過ぎたかもしれない。時代的背景、デューイの教育思想の背景の中でこの論議を正確に解釈していく作業を一方で進めていく必要があるが、とりあえず本教育学部の教育における教育実習をどのようにしていったらよいのかという問題を明らかにしていくプロジェクトの中の一つの作業として、デューイの論の示唆しているものから直接的に学ぼうという意図で、この小論を作成した。

上に論じてきた理論と実践の分離している状態を乗り越えることこそ、教育実践学の課題であろうし、この課題の追究ということと関連づけて教育実習の問題も取り組まれているといえよう。